



基調講演『人を育てる』

RI第2680地区パストガバナー 深川 純一

ロータリーは、今年創立100周年を迎えました。この100年を顧みますと、ロータリーも随分変質しました。殊に、ロータリー創立以来95年を経過して、2001年の規定審議会で激変致しました。

皆さん、ご存じのように、ロータリーの組織の原点と言われた一業一会員制の原則が廃止になりました。更に、1922年に制定された標準ロータリークラブ定款に違反するロータリークラブの設立も認めようと言うことになりました。

このように、一体、ロータリーは何処へ行くのか、と言うほど激変致しました。

ところで、ロータリー運動は恰も振り子のようなものです。振り子は、時代の変遷に従って、ある時は右へ揺れ、ある時は左へ揺れます。そしていつかは元に戻るのです。

2001年の規定審議会で一業一会員制の原則が廃止になったということは、一つの時代のエポックとして、ロータリーの振り子が振り切ったことを意味します。まさに、一業一会員制はロータリー創立以来95年経って廃止になりました。この時点で、ロータリーの振り子は振り切ったのであります。では、今度何時元に戻るのか。95年のスパンで戻るのか。それは判りません。

しかし、廃止になった一業一会員制の原則は、ロータリーの本質に根ざした基本原則であり、良質な原理であります。世の中の現象は時々刻々として変化します。したがって、一業一会員制の原則も現象としては、一時的には消滅しました。しかし、一時的に、現象としては消滅しましたが、良質な原理としては存在するのであります。

したがって、良質な原理はいずれ時代を超越して必ず復活すること忘れてはならないと思うのであります。

実は、先日の地区大会では、安平和彦先生が『どないすんねんロータリー』というテーマでパネルディスカッションのリーダーをされたそうではありますが、そ

基調講演

の時に、『どうにかなるでロータリー』という結論が出たようであります。

しかし、私は、今のところは『どうにもならないロータリー』になったように考えております。しかし、ロータリアンである以上は、やはり、このロータリーをなんとか良いロータリーにするために努力しなければならぬと思うのであります。

実は、今日は、『人を育てる』というテーマを頂いております。

人を育てるというテーマは、その概念の幅が非常に広いのであります。しかし、今日は、ロータリーの会合でありますから、あくまでもロータリーとの関わり合いにおいてお話し上げたいと思います。

ところで、RYLA即ち、Rotary Youth Leadership Awards 訳して青少年指導者養成計画は、ロータリーが提唱している青少年奉仕のプログラムであります。そして、今日は、ロータリアンの中でも特にRYLAに関与しておられる方々のお集まりであります。

したがって、今日は、RYLAの核にあるものの考え方と、それに関連して、ロータリーの核にあるものの考え方についてお話をすることに致します。

さて、ロータリーが青少年との関わりを持ったのは、かなり古いことでありました。それはロータリーが出来て間もなくのこと、今から丁度100年前のことでありました。当初の物語としては、新聞売り子の少年を助けたという物語があります。

冬の寒い朝、シカゴの街角で新聞が売れないで困っている少年がいました。そこを通りかかったロータリアンが、『おじさんがよいところへ連れて行ってあげよう』と言って、クラブの例会に連れて行きました。

そして、クラブの会員に、『この子が困っているから助けてやってくれ。何をしたらよいか判るだろう』と言い、皆で新聞を買ってやり、中にはジャンパーなどを着せかけて帰してやりました。少年は、嬉しそう

に『おじさん達有り難う』と言って帰って行きました。それを見て、会員達は、世のため人のためになることをしたと言って納得したのであります。

このように、ロータリーは、当初、世の中の困った人を助けること即ち、弱者救済をもって奉仕と考えたのであります。

しかし、やがて、困った人を助けることだけが奉仕か、という反省がやって参りました。

確かに、困った人を助ける弱者救済は、ロータリーとしては避けて通ることは出来ない、どうしてもしなければならぬことではあります。このような金や物を恵む奉仕は、本来行政のなすべき仕事であり、奉仕性が弱いのではないかと。という反省が出て参りました。

したがって、それよりもボーイスカウトを育てたり、ユースホステルを支援したり、職業訓練所や学校を作ること、例えば、身障児の養護学校を設立するというように、人を育てる方向への奉仕をするという傾向も出てきたのであります。

この人を育てる奉仕の延長線上に、青少年奉仕の関係では、1962年にインターアクトクラブが生まれ、1968年にローターアクトクラブが生まれ、そして、1974年現在のRYLAが生まれるに至ったのであります。

ところで、ロータリーは、昔から、青少年を育てるために様々なプログラムを開発してきました。その中でも、青少年の心を育てるという意味で、最もロータリー的なプログラムと言えるものがこのRYLAなのであります。

このRYLAがロータリーの世界に初めて登場したのは、1959年、オーストラリアのクイーンズランド州創設100周年に当たって、ブリスベンロータリークラブがイギリス王女と同年代の青年男女を集めて、社会教育プログラムを実施したのがそもその濫觴の物語でありましたが、その後、このRYLAは、鳴かず飛ばずの状態が続いた後、1974年、アメリカのワシントン州のタコマで開催されて以後、まさに草原の野火のように全世界に広がっていったのであります。

ところで、一口にRYLAと言っても、実際に世界中の各地域で行われているものには、様々な形態があります。その中でも、今から27年前、1978年に元RI理事の今井鎮雄先生が開発されたRYLAがありますので、先ずその基本構想をご参考までに紹介しておき

たいと思います。これは、色々のRYLAの中でも、殆ど完成されたタイプの一つであろうかと思うのであります。

今井先生の基本構想の核になるものとしては、大きく分けて四つあります。

第1の核は、レベルの高い講義であります。

今井先生は、アメリカやオーストラリアのRYLAの資料などを見ても、アメリカのオリジナルなRYLAは、18歳から24歳までの若者を対象としているが、これでは日本の状況に合わないから、やはり日本の状況に合わせた日本独自のものを作らなければうまく行かないのではないかと考えられたのであります。

例えば、インターアクトを一生懸命やっても、受験勉強などがあつてうまくいかないのは、やはりアメリカとは少し社会の状況が違うからではないかと考えられたのであります。

したがって、RYLAがRotary Youth Leadership Awards 即ち青少年の指導者を作るという講習会であるというのであれば、オリジナルなRYLAのように高校生を育てるというのではなく、青少年の指導者を育てるという事を中心として考えようではないかと言うことになりました。そこで先生は、外国から色々資料を取り寄せて調べられたわけでありました。

その結果、日本にはボーイスカウトのリーダーなど青少年のリーダーが居ますが、そのリーダーを指導するリーダー即ち、指導者の指導者を作る、ということを中心にしようということになったのであります。

リーダーのリーダー・指導者を作る、言い換えると、日本には、ボーイスカウトのリーダーも居るし、ガールスカウトのリーダーも、青年団のリーダーも、子供会のリーダーも居るし、色々な青少年団体のリーダーが沢山居て、その青少年団体のリーダー達は、それぞれのリーダーの講習会で皆それぞれに立派な指導者によって指導を受けています。

したがって、ロータリーがそれらのリーダーと同じようなリーダーを養成するというのでは、屋上屋を重ねることになります。したがって、そのリーダー達がボーイスカウトやガールスカウトや子供会などでよりよい指導性を発揮してもらうためには、そのリーダー達を、世界的な視野でものを考えるような一段とレベルの高い指導者に育てるような指導者講習会にしようではないかと言う事になった訳であります。

言わば、一般の指導者講習会よりもレベルの高い、リーダーのリーダーを作る即ち、ロータリーでなければ出来ないようなレベルの高い指導者講習会にしようということでもあります

では、そのために何が必要か、と言うことになった時に、幾つかの問題が出て来ました。

そこで、先ず、第1に、リーダーの指導者になるような人は沢山居るが、それを育てるためには、もう少しレベルの高い理論的な話、或いは内容的に深みのある話をしてくれる講師を選ばなければならない。したがって、講師には一流の先生を選ぼうということになりました。

しかも、講師を選ぶときには、このRYLAが考えている或るビジョンというものを理解してくれる先生でなければなりません。

そして、受講生もその高いレベルの先生の話が判り、問題意識をもった受講生が、自分の持っている問題意識をより深めていくことが出来るような講習会でなければなりません。

したがって、その講師の話は、余程レベルの高い、しかも、或る方向を皆で考えることが出来るようなものでなければなりません。

したがって、ただ単に、タレントを集めてきて講習会をするとか、大学教授を集めてきて講習会をするのではなくて、このRYLAのビジョンに合った先生達で、しかも、レベルの高い先生達に来ていただいて、その先生達の話聞いた後で、それをディスカッションすれば、これが受講生達に或る方向性を示してくれるような、そういう講師の先生を選ぼうということになったのであります。

このように、レベルの高い講義でありますから、オリジナルなRYLAのように、受講生の参加資格が18歳から24歳までというのでは、講義の消化能力がないだろうというので、20歳以上(上限なし)の青年男女ということにしたのであります。

20歳以上としたのは、第1に、講義の消化能力の点からいえば、最低、大学の教養課程修了以上の学力が必要であるということと、第2に、RYLAでは、夜、皆で話し合ったりする時や、夜眠れない時に、酒を飲むこともあろうから、その時に、未成年者がいてはまずいということから、参加資格を20歳以上としたのであります。現実に過去の記録では、60歳近い人が参加

しています。

以上のように、レベルの高い講義でありますから、RYLAは、受講生達の教育の場であるのみならず、ロータリアン教育の場でもあるのであります。

以上が第1の核であります。

第2の核としては、カウンセラーシステムがあります。カウンセラーシステムは、このRYLAの重要な特色の一つであります。これは、どういうことかと言うと、受講生にリーダーをつけるのではなく、カウンセラーをつけようということでもあります。

カウンセラーというのは、受講生が抱えている悩みや問題を聞いてあげて、カウンセリングが出来る人達のことです。

そして、カウンセラーには、ロータリアンとロータリアンの奥様になっていただきます。

何故このことが大事かと言うと、RYLAではハイレベルの講義を聴くことになりませんが、ただ単に、レベルの高い話を色々な先生達にして貰っても、何故、ロータリーがこのRYLAを企画して、そのようなレベルの高い話を聞かせるのか、何故、ロータリーがRYLAを企画しなければならないのか、と言うことについては、ロータリアン自らが答えなければなりません。したがって、そのカウンセラーは、ロータリアン自らがやっていただく、ということになったわけです。

したがって、受講生にとっては、一方ではレベルの高い話を聞く。他方では、ロータリアン及びロータリアン夫人の人格を通して、ロータリーとは何かと言うことが判るのであります。これが大事なところでもあります。

話だけでなく、これが本当のリーダーのあり方なんだと言うことが、カウンセラーの人格を通して受講生に判っていただくためには、その見本としてのロータリアン及びロータリアン夫人が受講生のグループに入っていただいて、三泊四日寝食を共にして指導していただくと言うことが大事なことになるわけです。

勿論、このことは、随分大変なことだと思います。今から27年前に、初めてRYLAをした時には、受講生の中でロータリーとは一体何か、ということが問題になった時に、皆真面目な青年達でありましたから、ロータリーというのは、ホテルで高い食事をして遊んでいる、老人のマスターベーションだろう、僕らは、そんなロータリアンは信用しない、などという意見が

出てきたのであります。

昔、バーナード・ショウが、『ロータリーよ何処へ行く』『あれは、昼飯を食いに行くのさ』と皮肉ったのと同じ見方です。

私達は、キャビンタイムで受講生と殆ど徹夜の議論をして、結局は、ロータリーの本来の在り方というものを判って貰ったのであります。兎に角、大変なことでありました。

要するに、若者達に、ロータリーが持っているイメージとか、理想というものが判って、そして、受講生もまた、ロータリーが作ろうとする世界の平和だとか、新しい地域社会の建設だとか言うロータリーの理想と一緒に担って貰えるようなことになれば一番よいのではないかと、言うのが私達の願いでありました。

したがって、ロータリーのことについては、是非ロータリアン自身に答えて貰いたい。そのためには、俺はロータリーのこと知らない、と言う人がRYLAに来て貰っては困るので、ロータリアンには是非ロータリーのことを理解して貰いたいとお願いしてきたわけです。

このように考えますと、カウンセラーと言うものは、本当はなかなか難しいのであります。したがって、急にカウンセラーになるというわけにはいかないかも知れません。

しかし、このRYLAのカウンセラーは、プロのカウンセラーである必要はないのであります。受講生にカウンセリングの講義をして頂くわけではありません。ロータリアンとロータリアンの奥様と言う資格で、その生(ナマ)の人格をもって、受講生とつき合って頂ければよいのであります。

受講生は、それぞれが、或る人はボーイスカウトのリーダーとして、或る人はガールスカウトのリーダーとして、或いは子供会のリーダーとして、色々な団体のリーダーとして、グループを預かっている悩みを持っていると思いますから、キャビンでは、その悩みをお互いに話し合いながら、自分達で問題点を見つけあって頂きます。そして、その問題を解決する場合に、カウンセラーが何らかのサジェスションを与えることが出来ればよいと思うのであります。

第3の核は、親睦であります。何故、親睦が大事なのか。

それは、親しい人達の間では、お互いに悪口を言っ

ても怒ることはありません。むしろ、親しみをもって受け止めることが出来ます。

しかし、親しくない人達の間で悪口を言ったら、相手の人は怒るだろうと思います。したがって、同じ言葉であっても、お互い同士に信頼関係があれば、お互い同士の話は通じますが、信頼関係がなければ、同じ言葉であっても喧嘩になる場合もあるということでもあります。

したがって、人と話をしたり、人の話を聞いたりするカウンセラーの仕事は、実は大変難しいのであります。

しかし、難しいことではありますが、そこで大事なことは何かと言うと、

- ①お互いがどれだけ相手のことを知っているか、ということと、
- ②どれだけその相手との間に信頼関係が出来ているか、と言うことが大事なのであります。

したがって、一番大事なことは、私達のRYLAの仲間が信頼関係をもつということでもあります。

したがって、RYLAの中の雰囲気がよくするため一番大事なことは、カウンセラーの人達と受講生達との間、そして、ロータリアンと受講生との間に、本当の信頼関係があるかと言うことでもあります。したがって、大事なことは、カウンセラーも受講生もロータリアンも、皆がお互い同士信頼しあって仲良くなるということでもあります。これがロータリーでいうところの親睦であります。

ロータリーの奉仕は、親睦に始まって親睦に終わるとも言われているのであります。世のため人のために何かをしようとするときは、先ず、皆が仲良くなることが一番大切なのであります。ロータリーは、この親睦のエネルギーをもって、世のため人のために動いていこうと言うのであります。これがロータリーの基本的な図式なのであります。

通常、ローターアクトやインターアクトの親睦が熟成するには、時間がかかりますが、RYLAの親睦は一夜にして出来上がると言います。

それは、ロータリアンであるカウンセラーと受講生が3泊4日、一つのキャビンで寝食を共にして、リーダーとしての悩みを打ち明け合い、お互いの発想に学び合うためであろうと思います。

そして、この親睦は、RYLAが終わったあとも同窓会のような形で続いていくのであります。

私の経験では、今から27年前の第1回RYLAの受講生達のうちの何人かは、未だにお付き合いが続いており、その後の受講生の何人かとも未だに交流があるのであります。

そして第4の核は、延々7時間に及ぶディスカッションであります。これは、最初の4時間はバズセッション、あとの3時間はフォーラムという構成をとっています。

元来、ロータリーでは、通常、長くても2時間のフォーラムであります。このRYLAでは、バズセッションも入れて7時間のディスカッションをもって、徹底的に知性を錬磨するのであります。

これが第4の核であります。

このディスカッションの結果、第3の核である受講生達の親睦も熟成されるのであり、この親睦は、受講生達がお互いに学び合う親睦、即ちロータリーに所謂精神的親睦であります。これは、酒を飲んだり、歌を唄ったりする感性的な親睦とは異なって、RYLAの本来の親睦は、精神的親睦なのであります。

以上が、今井先生のRYLAの基本構想の核になるものであります。

ところで、昨今、青少年奉仕の分野では、既にインターアクト、ローターアクト、ライラセミナーその他諸々の実践プログラムが開発され、実践されていますが、これらの実践についても、ロータリアンとのかかわり合いにおいて、若干の問題があります。

まず、今から約30年位前には、ロータリーの青少年奉仕は、未だ歴史が浅く、最大の未完成物語であると言う考え方がありました。しかし、果たしてこれは真実か、と言うところから考え直さなければならないと思うのであります。

まず、歴史の視点から考えてみますと、青少年奉仕の歴史は、かなり古いのであります。即ち、シカゴロータリークラブの人達が世のため人のためのことを考え出した時に、最も素朴な考え方として、困っている人を助けようという発想を持ちました。そこで、冒頭に申し述べましたように、例えば、新聞が一枚も売れないで困っている新聞売り子の少年をクラブへ連れてきて、皆で新聞を買ってやった物語とか、1911年頃からは、その当時全米に澎湃として起こっていた民間の善意の運動である『身体障害のある子供のための養護学校設立の運動』に参加した物語が残っているのであります。

また、初期ロータリーがボーイスカウトの育成、ユースホステルの支援、奨学金制度の創設などの奉仕活動をしたと言う事実があります。

ただ、奨学金制度は、財源に限度があるため、奨学金を与えられる子供のほかに、与えられない子供もできてきます。即ち、峻別の論理が働きますので、色々と試行錯誤をしながら職業訓練所とか学校を建てる方向、即ち、人を育てる方向に変わって行ったという事実もあります。

しかし、いずれに致しましても、青少年奉仕の歴史は、決して浅いものではなく、初期ロータリーにまで溯ることができるのであります。

次に、青少年奉仕の分野は、ロータリーの最大の未完成物語であり、弱点である、という説があります。実は、この指摘は正鵠を射ているかも知れないのであります。

何故かと言いますと、ロータリアンと青少年とは、価値観も人生観も違いますから、RYLAで受講生達と対応する時にロータリアンの方に戸惑いがあるのではないかと、と思われるからであります。これは、青少年奉仕の実践に際して、是非とも留意すべき点であります。

私達も昔は青少年でありましたから、若い時にどのような体験や思考を持っていたかということは判ります。しかし、今の若者達には、当然のことながら、私達の年齢の体験がありませんから、価値観も人生観も違うのであります。

したがって、ロータリアンが若者達と話し合う時に、ロータリアンの方に戸惑いがあるのではないかとと思われるのであります。

元来、人間は、若い時には、何事も努力すれば獲得できる、という人生観を持っています。

一生懸命努力すれば、大学にも行ける、就職もできる、結婚もできる、家を建てることもできる、全てのことは、努力すれば獲得できるということを信ずることができた世代であります。

しかし、40歳を越えますと、今度は、どんなに努力してもボロボロと失って行く世代に入っていきます。

まず、体力を失います。若い時に身に付けた筋肉は衰えます。歯が抜ける、目は老眼になる、髪は抜けて行く、白髪になる、健康も損ねる、懸命に育てた子供は結婚して離れて行く、友人も死んでいく、やがて定

年で職を失う、という具合に、どんなに努力しても、全てのものをボロボロと失って行く世代に入ります。この気持は、若者達には、体験がありませんから絶対に判らないのであります。

しかし、私達には、失ったからこそ見えてくる新しい素晴らしい世界があります。失ったからこそ見えてくる素晴らしい世界があると信じて、敢えてその世界に飛び込んで行った人達もいます。

例えば、西行、良寛、或いは俳句の松尾芭蕉であります。この故に、日本には、昔から『老』というものを尊んだ文化があった筈であります。したがって、『老』という字を尊敬の意味で使っておりました。例えば、『老成』『老練』『老熟』であります。

私達は、やがてこの世を去るその前に、年をとって失ったからこそ見えてくる新しい世界、失ったからこそ身につけた知恵を青少年に伝えておかなければなりません。これが、青少年奉仕の核心にある考え方、したがって、またRYLAの核にある考え方であります。

では、一体、具体的には何をどのようにして伝えればよいのか、ということが問題であります。

RYLAで若者達と話し合うときに留意すべきことは、お互いに人生観・価値観が違いますから、こちらの価値観を押しつけると相手は反発して素直に聞き入れません。

だからと言って、相手の価値観に迎合すると、今度は見縫って話し合いになりません。この辺が大変難しいのであります。したがって、若者達と話し合う時に、価値観も人生観も違うもの同士が話し合うには、ロータリアンの方でその対応の仕方について頭の整理をしておかなければなりません。そうでなければ、いたずらに反発だけを買うことになるか、或いは面従腹背で馬鹿にされる、という結果になり、話し合ったことが無意味になると思うのであります。

したがって、最も肝要なことは、ロータリアン自身が、或る時代にだけ通用するような価値観ではなく、ロータリーの考え方のような万古不易な考え方、即ち、ロータリーの哲学のような考え方、何時の時代にも通用するような価値観を先ず持って、その上で話し合わなければならないと思うのであります。

さて、昔は、私達も青少年でありました。そして、いま年老いて、やがてこの世を去ったあとに、今の青少年達が老人になり、その次にまた新しい青少年達が

続いているわけであります。このような順送りは、地域社会の中で行われます。したがって、私達は、地域社会との関わり合いにおいて青少年奉仕を考えなければならないのであります。

地域社会のことをコミュニティ（community）と言っていますが、コミュニティとは一体如何なるものか、と言うことを先ず考えておかなければならないと思います。

ドイツのテンニースという学者が、コミュニティ（community）とソサイアティ（society）について論じています。即ち、

ソサイアティというのは、利益を追求することが一つの要素になっている社会のことであり、コミュニティというのは、金銭などでは計り知れないほど価値のあるものを追求する社会、利害の共通する共同社会のことであります。日本語に翻訳すると、同じく社会であります。辞書を引いて見てもニュアンスが異なるのであります。

そこで、コミュニティは、金銭などでは計り知れないほど価値のあるものを追求していく社会でありますから、青少年奉仕の分野でコミュニティに奉仕するということは、例えば、RYLAを開催するということは、金銭などでは購えないほど貴い青少年というものをコミュニティの中からお預かりするということを意味するわけであります。

したがって、絶対に事故を起こしてはならないのであります。もし事故を起こして、何億円かの保険金を受け取ったとしても、掛け替えのない青少年の命を失った損失は、金銭などでは埋めることはできないものなのであります。青少年奉仕を実践するときには、瞬時もこの事を忘れてはならないと思うのであります。

ところで、コミュニティは、現象的には年々歳々変動して行きます。殊に、人口構成の変動が顕著であります。入れ替わり立ち代わり、人間が老いて亡くなり、生まれて老いる、この繰り返しの内にコミュニティの人口構成は、次第に変動して行くのであります。

少し古い厚生労働省の統計によりますと、2025年になると、65歳以上の高齢者の全国民に占める割合が26%を越えます。即ち、100人のうち26人が高齢者であります。まさに、高齢社会の到来であります。

人間は、年をとると効率のある労働を提供する事が出来なくなりますから、必然的に誰かがその高齢者を

養って行かなければなりません。すると、100人のうち26人という事は、大体、4人に1人が高齢者でありますから、3人が1人の高齢者を養っていかねばならないこととなります。

しかし、実際は、もっとシビアな状況になります。何故かと言うと、3人のうちには、赤ん坊も、未成年者も、働けない人も居ますから、実際には、2人で2人の高齢者・被扶養者を養って行かなければならないこととなります。

このようなことは、現在の社会制度のもとでは、税金の負担が大きすぎて絶対に不可能であります。したがって、恐らく、会社制度も農業制度も学校制度も、果ては地方自治体から国家に至るまであらゆる社会制度というものを洗い流してしまうこととなります。

まさに激動の社会であります。その激動の時代が後20年にしてやってくる、その大津波がもう沖合に見えているのであります。

勿論、厚生省は、早くから社会資本の備蓄を叫んでいます。社会資本を備蓄するということは、若い労働力が多くて、年々歳々、基金に金が入ってこなければなりません。

ところが、高齢社会になると、若者の数が減って、基金に入ってくる金も減るのであります。したがって、年金の財源も減ります。

そして、被扶養者である高齢者の数が増えるのであります。したがって、社会資本の備蓄という、言わば量の発想では、この激動の時代を乗り切ることはできないのであります。

そして、この激動の時代を生き抜いて行かねばならないのは、実は、RYLAの受講生を含めて今の青少年達なのであります。したがって、私達は、この世を去る前に、激動の時代を生き抜いていく知恵を若者達に伝えておかなければなりません。

これが青少年奉仕の核心にある問題であり、RYLAの核心にある問題なのであります。

では、激動の時代を生き抜いて行く知恵とは、そもそも何ぞや。

今申し上げましたように、社会資本を備蓄するという量の発想では、激動の時代を乗り切ることは絶対に出来ません。残るところは何か、それは心の問題であります。

ロータリアンがクラブ例会で親睦のうちに心を磨く、

RYLAの受講生達がキャビンやディスカッションで親睦のうちに心を磨く、所謂、禅の修行で言う『洗心の修行』の中からその知恵を授かることが出来ると思うのであります。

したがって、ロータリアンも受講生達もその問題意識を持ちながら共に考えて行かなければなりません。そのためのRYLAであります。これは緊急を要する事態であり、ただ漫然とRYLAをやっている暇はないのであります。

したがって、ロータリーは、インターアクト、ローターアクト、ライラ、海外青少年交換その他色々な奉仕プログラムを実践していますが、それは結局何のためにやっているのか、その一点がはっきり自覚されていないと、何をしても全てが空しい結果に終ることになるのであります。

昔、道元禪師が、中国の天童山の如浄和尚のもとで修行しておられた時の話を紹介しておきます。

道元禪師が昔の人の言行録を読んでいた時、かねて尊敬している先輩がそれを見て、『何のためにそんなものを読んで居るのか』と尋ねました。『古人の言行を学ぶためだ』と答えると、彼は重ねて『何のために学ぶのか』と聞きます。『学力を養うためだ』と答える。彼は更に、『何のために学力を養うのか』と聞きます。『日本に帰って多くの人を救うためだ』と答える。

『何のために人を救うのか』と聞く。『万人の成仏を実現するためだ』と答える。『ぎりぎりのところ、それは、どういう目的のためなのか』と問い詰められて、道元禪師は返答に窮したと述懐しておられます。

これは、畢竟如何という問でありまして、それがあやふやであっては、何事をやっても空虚に終るばかりである、ということをや道元禪師は言っておられるのであります。

この理は、ロータリアンにとっても同じ事でありまして。即ち、ロータリアンは、自分は何故ロータリーに入っているのか、そして、何故、このRYLAをやるのか、その根本の理由がはっきり腹の中に入っていないと、RYLAをやっても全て空しく終るばかりであると思うのであります。

私達は、このRYLAを実施するについても、その根本の理由を大悟徹底的に理解しておくべきであります。

ところで、本来、RYLAのように青少年の指導者を養成することは、地域社会に存在する青少年団体、

例えば、ボーイスカウトやYMCAに委せておけばよいことでもあります。ロータリーが嘴を入れるべき筋合いのことではないのかも知れません。

しかし、RYLAで青少年の指導者を育てると言うことは、人を育てると言うことであり、ボーイスカウト等の青少年団体だけに委せておいてよいものでもありません。

人を育てると言う教育の仕事は、学校教育のほかに家庭教育があり、社会教育もあります。ロータリーという制度も人を育てると言う意味では一つの社会教育の機関であります。したがって、一人の人間を育てる、青少年の指導者を育てると言う教育の仕事は、学校を初め家庭及び社会のあらゆる教育機関に関わり合いのあることでもあります。

したがって、ロータリーとしては、社会教育、家庭教育の場面で何らかのお手伝いが出来ればと思うのであります。

したがって、教育というものを総合的に考えた場合に、ロータリーのもっているビジョンとか理想とかいうものを受講生達に判ってもらえるようなプログラムができないものとロータリーは考えたわけでありまして。

要するに、ロータリーとしては、RYLAを通じて、ロータリーがもっている世のため人のための奉仕のビジョンとか、ロータリーの心とでもいうべきものを受講生達に判って貰いたいのであります。

世のため人のために動いていく心、奉仕の心を受講生達に授けることができたならば、それが、ロータリーとして世のため人のために寄与することになると考えた訳であります。

要するに、ロータリーとしては、RYLAの受講生達に世のため人のための心、奉仕の心を持って貰いたいのであります。そのためには、ロータリアンがRYLAで受講生と話をするとき、先ず、ロータリアン自身がロータリーのことを判っていないければなりません。

そこで、一体ロータリーとはそもそも何ぞや、ということをお話しなければならぬと思うのであります。

先ず、ロータリーに対する一般社会の人達のイメージはどのようなものか、と言いますと、或いは大金持ちの実業家の社交クラブだと思われるかも知れません。或いはまた、色々な社会福祉事業に寄付をする寄付団体だと思われるかも知れません。或いはまた、

ボランティアの団体だと思われるかも知れません。

大金持ちの実業家の社交クラブであるという点については、戦前のロータリーは、確かに一握りの超一流の実業家の集まりでありました。例えば、半期のボーナスが1億円という身分の人達の集まりでありました。ただ、その半面において、女工哀史などに見られるように初期資本主義の搾取があったのであります。

しかし、これは戦前の日本だけの特殊事情でありまして、戦後のロータリーは、ロータリアンの数が爆発的に増えたこともあり、庶民化されて小市民的な職業人の社交クラブとなっているのであります。

元来、20世紀初頭、丁度今から100年前に最初に出来たシカゴロータリークラブは、零細企業の経営者の集まりでありました。まさに貧乏人の集まりでありましたが、会員相互の助け合いと世のため人のための奉仕の心をもって働き続けたために、やがて、豊かなクラブライフを作り上げて行ったのであります。

このように、ロータリークラブは、もともと大金持ちのクラブではなかったのであります。

また、ロータリークラブは、寄付団体でも、慈善団体でも、ボランティアの団体でもありません。ロータリークラブの本質を一言で言えば、それは、世の中に倫理を提唱し実践していく職業人の倫理実践団体なのであります。

したがって、ロータリー運動というものは、一つの倫理運動なのであります。では、倫理運動ということは具体的に言えばどういうことかといえますと、

例えば、街角にタバコの吸い殻が落ちていたとします。ロータリアンとしては、町を美しくするためにそれを避けて通ることはできません。必ずその吸い殻を拾うでしょう。しかし、ロータリーは、そこにロータリーの本願はないよ、と言います。タバコの吸い殻を拾うことは避けて通ることができないにも拘らず、それを拾うことにロータリーの本願はない、と言うと、一体どこにロータリーの本願があるのか。

ロータリーの本願は、タバコの吸い殻を捨てない人を育てるところにあると言うのであります。人を育てること、道徳を守る人間を作ること、その事によって世のため人のために動いて行こうとロータリーは言うのであります。見方を変えれば、それがまさにロータリーが倫理運動だと言うことを意味するのであります。

この点をとらえて、ある学者は、『ロータリーとは、

人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である』と断言しているのです。この倫理運動であるという視点を見失いますと、ロータリーが判らなくなるのであります。

このように、ロータリーが倫理運動であるということは、人を育てることを意味するのであります。RYLAもまさに人を育てるプログラムであります。したがって、ロータリアンは、ロータリーが倫理運動であるということをRYLAで受講生に話しかけるべきであります。

ただ、ロータリーが倫理運動であるということについて、最近の私達の職業社会の現状を見ますと、ロータリーの倫理運動がどれほど機能しているのか疑問なしとしない状況であります。即ち、

最近、企業の不祥事の発覚により、どんなに優良な企業であっても、マスコミの厳しい批判に曝されて、一瞬にして企業の信用を失墜して消滅する事例が多発していることはご承知のとおりであります。例えば、

牛肉の産地・品質の偽装という不当な原産国表示をした雪印食品は、偽装表示が発覚してからわずか1ヶ月後に会社の解散を決定しており、親会社である雪印乳業も「雪印」というブランドを放棄せざるを得なくなりました。

また、家畜伝染病予防法違反の浅田農産は、鳥インフルエンザの発生を隠蔽したことが発覚してから僅か3ヶ月後に廃業を決定しています。

また、日本ハムの子会社である日本フードが、BSE対策のための国産牛肉買い上げ制度を悪用して、国に海外産牛肉を国内産牛肉と偽って買い上げさせたという食肉偽装事件（刑法246条違反事件）が発覚したため、親会社の日本ハムのブランドは、消費者の信用を失って、日本ハム製品がスーパーマーケットの棚から消えてしまいました。

その結果、日本ハムは、350億円に上る売り上げ減少の損失を被ったのであります。子会社が海外産牛肉を国内産牛肉と偽って得た利益は、僅かに1000万円であるに関わらず、その1000万円を得るために子会社が行った違法行為のために、日本ハムグループ全体に350億円もの損失を招いた訳であります。

また、リコール隠しの三菱自動車工業事件（道路運送車両法違反事件）、食品衛生法上認められない物質を使用して製造した肉マンを販売したダスキン事件その

他職業倫理に違反した事件は、枚挙に暇がないのであります。

しかも、このような職業人の倫理の退廃振りは、洋の東西を問わないのであります。アメリカでも優良企業と言われた通信大手ワールドコムやエネルギー大手エンロンの粉飾会計等々があり、職業倫理の退廃は、誠に目に余るものがあります。このような状態では、職業社会の繁栄は有り得ないと言わざるを得ません。

これらの現象は、1990年代のバブル崩壊後、従来の高度経済成長の矛盾から生じた現象であり、経営者や従業員の職業倫理の衰退が原因であると考えられるのであります。

昨今、これらの事例を集約して、コンプライアンス・法令遵守ということが提唱されています。しかし、法令を守るということは、人間として当たり前のことでありまして、法令というものは、人間として守るべき倫理の最低基準を示すものに過ぎません。したがって、法令を守っておればよいという問題ではありません。元来、ロータリーの提唱する職業倫理は、このようなレベルの低いものではないのであります。法令遵守よりも遙かにレベルの高い倫理基準を提唱するものなのであります。

「ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり」と言われるように、ロータリーは、20世紀初頭以来、職業奉仕の実践について高潔な倫理を提唱してきたのであります。何故、倫理を提唱するのか？ いわずと知れたこと、それは、人を育てるためであり、これは、ロータリー運動が倫理運動である以上当然であります。

そこで、先ず、ロータリーが、どのようにして職業倫理を提唱するようになったのかということからロータリーの原理の世界を眺めてみたいと思うのであります。

先ず、100年前の1905年時点では、ロータリアン達が仲良くなって助け合う、所謂親睦だけのロータリーでありました。そして、初期のシカゴクラブは、例会における会員同士の発想交換機能・アイデアの交換機能によって、恰も経営相談所的な機能を果たすようになったのであります。

やがて、ロータリーに世のため人のための発想が芽生えて参ります。そして、1908年には、例会における発想交換機能によって、企業経営上のノウハウを開

発し交換すると共に、世のため人のための奉仕のアイデアも交換するようになったのであります。

そこで、企業経営について、為すべきこと、為すべきからざることをお互いに誓い合うという所謂倫理の提唱をするようになり、この精神的な助け合いによって、会員達の企業は益々栄えていったのであります。

このようにして、当初、親睦だけの集まりであったロータリークラブに世のため人のための奉仕の考え方が入って来て、企業経営が世のため人のためという倫理性を帯びるようになったのであります。即ち、

1910年以降、世のため人のための企業経営、倫理的な企業経営を提唱し、実践するようになり、この個人倫理の集大成として、1915年のサンフランシスコの国際大会において、『全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓』（別名『ロータリー道徳律』）11ヶ条を採択するに至ったのであります。これがロータリーにおける個人倫理の確立であり、その後ロータリーは、その運動の核として高潔な倫理を提唱してきたのであります。

その後、昭和3年（1928）大連ロータリークラブの古沢文作氏がロータリー思想の源流を探求して、この『ロータリー道徳律』を発見し、これを日夜お経の如く熟読玩味して5ヶ条の日本語に書き改めたのが、昭和3年の『大連クラブのロータリー宣言』という倫理宣言であります。

大連クラブでは、毎週例会の初めに、先ずこの5ヶ条を朗読していたのであり、日本ロータリーの創立者米山梅吉先生が昭和4年の日本最初の地区大会であるRI第70地区の大会において『古沢さんこそロータリアンの鏡である』と激賞されたと言う記録が残っているのであります。

このロータリー宣言が戦前の日本のロータリアンの職業倫理のバックボーンとなっていたことは、紛れもない事実なのであります。

戦後の日本のロータリーでは、東京浅草ロータリークラブの『玩具職業人倫理宣言』があり、最近では、平成7年6月28日仙台青葉ロータリークラブの宣言した『職業倫理宣言』があります。

実は、1923年のセントルイスの国際大会で採択された決議22-34号の第2項の2は、ロータリークラブというものはこの様な倫理の宣言をしなければならぬと規定しているのであります。

これらの倫理宣言は、いずれもコンプライアンス即ち、法令遵守と呼ばれるレベルのものとは比較にならないほどレベルの高い倫理を提唱してきたものであります。

ロータリーが、一般の法令遵守のレベルではなく、遙かに高潔な倫理を提唱してきた事例としては、例えば、取引社会における『賄賂禁止の原則』があります。

親会社と子会社、元請と下請その他あらゆる取引関係において、当事者の力のバランスが崩れると、力の弱い者が強い者に対して賄賂を贈るという現象が起ります。これは、自分だけが良い仕事にありつこうというエゴイズムの心に基づくものでありますから、もとより公正な取引社会の実現という理想にはほど遠いものであります。

そこで、ロータリーは、古来、倫理運動の視点から、賄賂の授受を厳に戒めているのであり、これは職業倫理の核にある大きな柱なのであります。

1931年即ち昭和6年の日本の2代目のガバナー井坂孝氏のガバナー月信第1号（S.6.8.10）は、夙に有名であります。

彼は、国際ロータリー第70地区のガバナーに就任して、全国のロータリアンが拳々服膺すべき職業倫理の三ヶ条を提唱しました。即ち、第一に曰ク、ロータリアンたる者は約束を守るべし。第二に曰ク、ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ。

第三に曰ク、ロータリアンたる者は徒に慈善事業に憂き身をやつすことなかれ。

この中で、職業倫理との関係で特に重要なのは、第二の『ロータリアンたる者は賄賂を贈ることなかれ』であります。これは、言うまでもなく、賄賂の横行しない健全な取引社会・公正な自由競争社会の実現をめざすものであります。

ロータリーは、賄賂の授受が、健全な取引社会と公正な自由競争社会の実現を阻害することを説くのであります。それは同時に、賄賂の授受が、結果的には当事者自身の信用を失墜し、企業の発展を阻害することを説いているのであります。

ところで、ここに賄賂というのは、法律上の概念ではありません。即ち、法律上、賄賂の授受によって収賄罪、贈賄罪が成立するためには、それを受け取る側が公務員でなければなりませんから、法律の世界では、私人間には賄賂罪は成立しないのであります。しかし、

ロータリーは、法律の世界ではなく、倫理の世界でありますから、倫理運動の立場から、私人間の賄賂の授受をも禁止しているのです。法律を守っているだけでは駄目なのであります。

単なるコンプライアンス・法令遵守のレベルであれば、公務員に対して賄賂を贈らなければ犯罪にはならないのでありますから、私人間で賄賂を贈っても何ら問題にならない筈であります。ところが、ロータリーは、高潔な職業倫理の立場から私人間の賄賂の授受も禁止しているのです。

しかもロータリーは、倫理運動の立場から賄賂の概念を広くとらえているのであります。即ち、

ロータリーは、労働の対価として受取る正当な報酬、または取引の対価として受取る正当な所得以外の一切の金品の授受は、これを悉く賄賂と見做すのであります。したがって、これは法律概念ではなく、倫理概念であります。

これが基本原則であります。この立場から見ると、盆暮の中元・歳暮も賄賂になります。すると、その品物の受領を拒むことが、相手の善意を踏みにじることになるなど、この原則だけでは処理し切れない様々な事態が発生します。

そこで、ロータリーは、このような状況を踏まえて、第二の原則を立てます。それは、『公開の原則』(Publicity)であります。即ち、特定の物品または金銭の授受が、賄賂になるかどうか疑わしい場合にあっては、それを公開すべし、というのであります。即ち、ロータリアンは、クラブ例会において、それが賄賂になるか否かを公表して、他のロータリアン意見を聞けばよいのであります。

『歳暮として羊羹を貰ったがこれは賄賂か』と聞いてみて、皆が『それは社交儀礼のものだから賄賂にはならない』と言え、それで賄賂性は消えるのであります。

これに反して、例えばロッキード事件のピーナツ一つ5億円、これは誰に聞いても『それは賄賂だ』と言うでしょう。これはロータリーの倫理運動の立場から見て完全に賄賂であります。したがって、心に疚しいことなければ堂々と公開できる筈であります。ロータリーはそここのところを見ているのであります。

以上を要するに、第1に、ロータリアン自身が、その金品を受け取ることによって、職業関係の公正さを

害しないか否か、心に疚しいことがないか否か、を主観的に判断し、第2に、クラブ例会において、皆の意見を聞いて、客観的な社会倫理によって篩にかけるのであります。

このようにして、ロータリーは、高潔な倫理を維持してきたのであります。

そこで、ロータリーが人を育てる即ち、倫理運動であることの具体的な事例を紹介しておきます。

それは鮎と言う魚の物語であります。鮎は、一年魚でありますから、一月頃、海から遡上して、一年で育ち切って、秋になると、自らの血脈を残すために川を下ります。そして、河口近くに産卵して、一年の短い一生を終えるのであります。しかし、全ての鮎がこの様に天寿を全うするわけではありません。多くの鮎が人間に釣り上げられて命を落とします。就中、鮎の友釣は、鮎の悲しい習性を利用した釣法であります。即ち、

鮎の社会は、自分の餌場を確保するために、激しい競争原理が支配します。強い鮎がテリトリーをもって餌場を独占し、他の鮎がそのテリトリーを侵すと、猛然と攻撃してこれを追い払います。

そこで、この習性を利用して、釣針を仕掛けた罠鮎を野鮎のテリトリーへ誘導し、野鮎の攻撃を誘って釣り上げるのであります。したがって、もし、鮎達に餌を分かち合う共存共栄の心があつたならば、鮎の友釣は成り立たないのであります。

ところで、自分の餌場を独占して、自分だけが大きく育って行こうとする鮎達の生態を思うとき、同じく自由競争原理の支配する私達の職業社会は、果たして如何なるものであろうかと思うのであります。

先ず『同業者』の問題があります。資本主義経済社会は、自由競争が基本原則であります。したがって、同業者同士は、競争関係にありますから、まさに食うか食われるかの関係にあり、競争相手がいるために、ある種の危機感を持ちます。したがって、自分が潰れる前に彼が潰れてほしいという訳の判らない感情の虜にもなります。

また、同業者は同じ業界にいますから、お互いに、悪いところも、醜いところも、汚いところも知り尽くしています。したがって、彼は俺の欠点を知っているな、という意識がありますから、お互いに心を開くことができません。

更に人間は、自分だけは先ず栄えておかなければ、

いつ潰されるかも知れないと思いますから、人のことなど考えている暇はない、即ち倫理のことなど考えている暇はないと言って、自分だけ隆々と栄えていこうとします。そのために失敗する例が沢山あるのであります。一つの事例を出しておきます。

或る下請業者が親会社から自分の生産能力を越える注文を受けました。下請業者は喜んで、銀行から融資を受け、第二工場、第三工場と設備投資を致します。ところが、この設備投資がある程度大きくなった時点で、親会社は注文を止めます。下請業者は、受注の減少によって融資の返済に困り、親会社に泣きつきます。親会社は、それでは金を貸そうと言って、資本参加をして、結局、下請業者を乗っ取ってしまうのであります。

これは、企業が比較的短期間に大資本に成長していく過程でよく見られる恨みつらみのある物語であります。この事例を見てどのように思われますか。多分、一般社会の人達は、親会社・大企業が悪いと思います。これが一般社会の常識であります。

しかし、ロータリーの考え方は、そうではありません。これは、親会社が悪いものではありません。下請業者が自分一人で儲けようとしたところに問題があるのであります。まさに、一般社会の常識とは逆転の発想であります。これは、ロータリーが倫理運動であることを考えれば当然の結論であります。

自分の生産能力を越える注文が来たときに、同業者もいることです。これ以上の御注文は同業者の方へどうぞ、と言っておればよかったです。

しかし、そう言うものの企業経営者は、自分の企業を安泰にさせたいために、注文が来れば儲けたくになります。こここのところが大変難しいのであります。

これに反して、例えば、或る有名な菓子屋では、いつも午後3時頃になると、商品が売切れます。有名な店でありますから作れば作るほど幾らでも売れるのであります。午後3時頃になると売切れてしまう、その程度の商品しか作らないのであります。それは一体何故か？

確かに、作れば作るほどいくらでも売れます。儲けに儲けることは出来ます。しかし、自分の生産能力を越えて、150% 200%の商品を作れば、儲かるかも知れませんが、粗悪品の出る可能性も出て来ます。一つでも粗悪品が出ると、お客様に御迷惑をかけることになります。

更に、自分の信用を傷つけることにもなります。信用というものは、金銭をもってしては計り知れないほど価値のあるものであり、一旦失ったら取り返しの付かないものなのであります。したがって、精魂込めて自分の生産能力の80%の商品しか作らないのであります。これが職業の倫理であります。

そして、自分の生産能力を越える注文に対しては同業者の方へ譲るのであります。これが同業共存共栄の倫理であります。この点を見れば、ロータリーがまさに倫理運動であることが判るのであります。

このように、昔から、人間が徒らに金を求めて身を滅ぼした例は枚挙に暇がありません。しかし、人間が心を求めて身を滅ぼしたことは、未だその例を聞かないのであります。

ロータリーは、倫理の裏打ちのある企業活動こそが永続的に安定した利潤を獲得し、自由競争を必ず勝ち抜いて行くということを原理論的にも実践論的にも立証して行くものなのであります。

既に立証されている事実としては、1929年に始まるアメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニックに際して、ロータリアンは一人も倒産していないという事実であります。

これは、ロータリアンが例会における発想交換機能を通じて、倫理的な企業活動のノウハウを開発し、それを自らの企業に実践してきた功徳だと言われているのであります。この故に、ロータリーは、不況期に強い哲学であるとも言われているのであります。

今、ロータリーは、哲学であるといいましたが、まさにロータリーは、一つの哲学思想なのであります。ロータリーと呼ばれる一定の質の思想なのであります。

ロータリーは、今から約80年くらい前に、ロータリーとは、そもさん何ぞや、ということで大激論をしました。それは、ロータリーが分裂するほどの大喧嘩でありました。その結果、ロータリアン達は、『ロータリーとは、利己と利他との調和を目的とする人生の哲学である』と悟ったのであります。

このように、ロータリーとは、人生の哲学であり、哲学思想なのであります。そこで、このロータリーの思想の世界にも、大きな問題があります。これは、ロータリアンがRYLAで受講生に是非話しかけるべき問題であります。

先ず、例え話をします。これは、昔、ギリシャの哲

学者カルネアデスが出した問題であります。大海原で船が難破し、二人の人間と一枚の板切れが投げ出されました。その板切れは、二人が掴むと沈みますが、一人だけが掴むと浮いています。このような場合、その板切れを相手に与えて自分が沈むのが正しいのか、それとも、相手を押しのけて自分が助かるのが正しいのか、という問題であります。

皆さんは、どちらを選びますか？難しい問題であります。私達も昔、この問題でディスカッションをしましたが、意見は真二つに割れました。

カルネアデスは、自分の命を犠牲にして、相手を救うのは正しいことも知れないが、それは愚かなことだと言いました。

しかし、実際にあった事例を紹介すると、昔、北海道で洞爺丸が遭難した時、アメリカの学生YMCAの主事であったディーン・リーパーは、自分のライフジャケットを若者に与えて、自分は船と共に沈んだのであります。後で聞きますと、その時、ストーン神父も同じようにして、若者を助けて自分は船と共に沈んだと言います。自分を犠牲にして、人を救うべきか否か、誠に難しい問題であります。

これは、例えば、青少年のリーダーが子供達を連れてキャンプに行ったときに、このような事態に遭遇した場合、どのように対処すべきか、の問題でもあり、RYLAが青少年の指導者養成計画であるならば、このような問題をロータリアンがRYLAで受講生に問いかけるべきであります。

実は、これと同じ原理が当てはまる問題がロータリーの分野にもあるのであります。

例えば、ロータリアンは、お客様に納めた商品（例えば機械）に絶対的な責任を負わなければなりません。したがって、もしその商品に欠陥があることが判明した場合には、その全ての機械をお客様から回収し、完全な商品に修理して再びお客様のところへ届けるというアフターサービスを実行しなければなりません。

しかし、そのアフターサービスを実行すると、会社が倒産することが計算上明らかになった時にどのように対処すべきか、という問題であります。

即ち、カルネアデスの問題で言えば、自分を犠牲にしても相手を救うべきか、ということありますから、この場合、会社を倒産させてもアフターサービスを実行すべきか否かという問題であります。

この問題は、ロータリーの中でも意見は真二つに割れます。

一つの意見は、例えば会社が倒産することが明らかになっても、アフターサービスを実行するべし、と説くのであります。即ち、例えば会社を倒産させることになっても、即ち、自分を犠牲にしても、アフターサービスに徹すべし、というのであります。

しかし、これは大問題であります。それを実行して、もし計算通りに会社が倒産してしまったらどうするのか。社員も家族も路頭に迷うことになります。株主に対する配当責任も果たせません。事と次第によっては背任罪になるかも知れません。奉仕も何も出来ないではないか、と言うのが一般のロータリアンの声であります。しかし、これを実行した人は、全て成功しているのであります。

事例を紹介しておきます。ドーナツを作る機械を製造販売している会社であります。或る時、納品した機械に欠陥が発見され、それを全部回収して修理し、再び全てのお客様のところへ届ける作業をすると、計算上、確実に会社が倒産することが明らかになりましたが、社長は、ロータリアンとして、敢えてその作業を実行したのであります。

人との契約は、事情変更の原則その他の理由によって解約することができますが、神様との契約は破ることが出来ません。

そこで、欠陥のある機械全部を回収して、銀行融資を受けながら、四苦八苦して何とかその作業を成し遂げたのであります。その後何かが待っていたか？その会社は、絶大なる信用をもって報いられ、やがて、世界的な企業にのし上がって行ったのであります。

この事例は、一体何を物語っているのか？

日本の諺にも『振り下ろす太刀の下こそ地獄なれ、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ』とか『虎穴に入らずんば虎兇を得ず』と言うのがあります。ロータリーは、そここのところを見ているのであります。

ロータリーは、計算上赤字になって倒産すると言うのを『机上の空論』と言うのであります。ロータリーは行動哲学でありますから『先ず実行してみよ』と説くのであります。

要するに、企業というものは、アフターサービスを完全に実行して初めて発展出来るのであり、それがまた業界の見本ともなって、業界を改良して行くことに

もなるのであります。ここに職業を通じて社会に奉仕する実践例を見取ることができるのであります。

この考え方は、ロータリーの奉仕は自己犠牲・自己滅却の奉仕であると説きます。これは、1911年ミネアポリスロータリークラブの初代会長でありましたベンジャミン・フランクリン・コリンズという人が提唱した“Service, Not self”の思想に基づくものであります。即ち、

selfは自己、それをNot、否定する、即ち、自己否定、自己犠牲、それがロータリーのServiceであると説くのであります。したがって、自分を犠牲にしてこの宇宙を支配する神の秩序体系のもとに帰依すること、それがロータリーの奉仕であるというのでありまして、極めて宗教的色彩の強い標語、宗教倫理に基づく標語であります。

要するに、コリンズは、「ロータリアンよ、自分の為すべきことを為して美しく散れ」と説くのであります。

しかし、散ってしまったら、奉仕も何も出来ないではないか、というのがコリンズに対する反論であります。

実は、ロータリーの創立者ポール・ハリスや1908年にシカゴのクラブに入会したアーサー F・シェルドンは、このコリンズの考え方をとっていません。

アーサー F・シェルドンは、ロータリーは宗教ではないのであるから、そのような宗教的なことを言うてはならない。Not self 即ち、自己犠牲の奉仕は行き過ぎである。あくまでも self 即ち自己は、温存して、selfの上に奉仕を考えるべきである、と言って、Service above self という実業倫理に基づく標語を提唱したのであります。時に、1921年頃のことであります。

これは、カルネアデスと同じ思想であります。自己犠牲ではなく、奉仕第一、自己第二、という考え方があります。このようにロータリーの思想の世界には、大きく分けて二つの潮流があるのであります。

因みに、YMCAの総主事であられた今井先生は、どちらの思想の世界におられるのでしょうか。今から27年前に第1回RYLAセミナーが終了したとき、受講生の何人かがTシャツをもってきて、今井先生に揮毫を頼みました。先生は、『身を捧げよ』と書かれました。これは、“Service, Not self”の世界にある言葉であります。流石クリスチャンだなと思った次第であります。

ところで、私は、戦時中特攻隊として散って行った戦没学生の言葉、『人のためには涙を流し、己のためには汗を流す』と書きました。これは、自己犠牲ではなく、己のためには汗を流す、と厳然として己が存在するのでありますから、“Service, Not self”ではなく“Service above self”の世界にある言葉であります。

この時、今井先生と私とでは、思想的に見て、棲んでいる世界が違うのだと思った次第であります。

以上を要するに、ロータリーというものは、寄付団体でも、慈善団体でも、ボランティアの団体でもなく、ロータリアンに世のため人のための奉仕の心を育てる、即ち、人を育てる学校のようなところであるということあります。

したがって、ロータリー運動は、倫理運動であるということ、平たく言えば、それは人を育てる運動であります。したがって、ロータリーが倫理運動であるならば、これらのことをRYLAの受講生に話しかけるべきであります。

次に、ロータリーが、何故、RYLAを始めたのかということ、それは、青少年の心を育てるためであり、人を育てるためであります。このことは、ロータリーが倫理運動である以上当然であります。

しかし、今、青少年問題は、危機的な状況にあります。毎日のように新聞紙上、殺伐な事件が報道されます。日常茶飯事のように、人が殺されています。親が子を殺し、子が親を殺す。まさに、人間は如何にあるべきかという人間の倫理というものが失われてしまっています。

どうして、このような状況になったのでしょうか。それは、戦後の倫理教育の空白がその一つの原因であります。人を育てる必要性が痛感されるのであります。ロータリーが倫理運動であるというのであれば、ロータリーにも一端の責任があります。この状況に対して何か打つ手があるのかと言うと、ロータリーとしては、倫理を提唱することによって人を育てていく以外に何らの手だてもないと言わなければならないのであります。

今から30年前、シンガポールの厚生大臣は弱冠37歳でありました。しかし、物凄い愛国心に燃えていました。

そして、『For the East』東へ向こう、と言いました。何故か？東には何があるのか。日本がある。日本を見習おう、そして、追いつき追い越そうと言いました。

当時、彼らがどれほど日本を尊敬していたかが判るの
であります。

日本は原子爆弾の洗礼を受け、敗戦のどん底から、
戦後30年にして経済大国を築き上げたのではないか、あ
の日本を見習おうと言って努力したのであります。

そして、シンガポールは、学校の先生達を優遇し、
建国の基礎に教育をおいたのであります。教育者を大
事にしたのであります。

ところが、やがて20年くらい前から、シンガポール
は、日本を見習うのは止めようと言い出しました。Not
for the East 日本の真似だけはするな、と言うのであり
ます。

何故か。戦後の日本の教育は、道徳や倫理を教えて
いない。日本は、知識を教える【知育】だけを大切に
して、道徳を教える【徳育】を忘れていた。彼らはそ
の事を切々と言うのであります。人間教育の一番大
事なときである小学校では、人間としてあるべき姿を
教えるべきである。それを教える先生は、シンガポー
ルでは大臣と同じ位に尊敬されているというのであり
ます。

ところが、日本は、戦後、道徳教育・倫理教育をし
ていない、このような国は将来必ず滅びるからだとい
うのであります。

今、日本の最重要課題は、環境問題でも、経済問題で
もなく、財政問題でもありません。それは、青少年の
教育問題なのであります。教育は、国家百年の大計で
あります。それは、まさに民族の興亡に関わる問題な
のであります。今、緊急の課題は、教育、特に青少年
の心を育てること、人を育てることです。

昔、Paul Tillich という神学者が、教育には三つの分
野があると言いました。

第1は、Technical Education 技術教育

第2は、Humanistic Education 人間がお互いに心豊か
になろうという教育・人道主義的教育とでもいべき
もの。

第3は、Inductive Education 人間とは何か、という真
実に引き入れる教育

戦後日本の教育は、第1の Technical Education 技術教
育一辺倒でありました。昔、ソ連がスプートニクを打
ち上げたとき、アメリカは慌てました。そこで、大学
に行くと100万\$儲かるよ、などと言って、技術教育
を奨励したのです。

そして、日本も同じように、技術教育一辺倒になって、
世界第2の経済大国を築き上げたのであります。

その結果、第2の Humanistic Education、第3の
Inductive Education の教育の分野が欠落してしまったの
であります。

私が Inductive Education という言葉を最初に耳にし
たのは、今から27年前の第1回 RYLA セミナーの時
でありました。その時、今井先生が『社会の動きと青
少年の実態』というテーマで講義をされました。その
講義の中で、今井先生は、先程紹介しました Paul Tillich
の言葉を引用されたのであります。

今井先生は、『戦後の日本では、技術教育ばかりに
専念したために、人間として大切なものは何かとい
うことではなく、人間には、どれだけの能力があるか、
ということ計る試験第一主義の教育が横行している
と言ってもよい。

しかし、世界的な視野に立ってみると、世界の状況は、
人間個人に中心をおいて、一人ひとりの人間の問題を
考えなければならない状況になっていると思われる。
技術教育というものから、もっと人間を大事にする教育、
所謂教育革命が世界の中に深く潜行してきたように思う。

しかし、日本の現実、未だ技術教育一辺倒のよう
に思われる』と言っておられるのであります。

この Inductive Education というのは、人間とは何か
という真実に引き入れる教育のことです。具体的には
どういうことか、と言いますと、例えば、科学技術の
発達によって医学は大変進歩しました。人間の幸
せのためには大変有り難いことでもあります。しかし、
医学の進歩の陰に、何千万、何億というモルモット
や実験動物の命が犠牲にされています。このことに
思いを馳せる人は、非常に少ないのであります。この
ことを一体どう考えるのか。

人間の幸せのためであれば、モルモットや実験動物
の命を奪ってもよいと考えるのか。しかし、彼らも神
様から命を与えられて生きているのであります。その
命を奪うことは罪ではないのか。もし、罪だとすれば、
その罪は、一体、誰が、何時、何処でどのようにして
償うのか。

元来、私達人間は、動物の命、植物の命、生きとし
生けるものの命を頂いて生きています。この生きとし
生けるものの命を奪って生きていく人間とは一体何か。
そもそも生きとし生けるものの命とは何か。

このようなことを青少年に問いかけていく教育の分野
が、現在の教育体系の中に欠落しているのであります。

実は、このようなことを青少年に考えさせる教育を
Inductive Education というのであります。人間とは何か
という真実に引き入れる教育であります。

青少年に、このような課題を与えて、彼らが成長して
いく過程において、一生涯の課題として解決して行か
せる教育、言わば、人間とは何かという真実に引き入
れる教育、これを Inductive Education というのであり
ます。

私は、この Inductive Education という言葉に強い感銘
を受けましたので、その後、私の恩師の先生にこのこ
とについて教えて頂きました。

その先生は、ご自分が小学生の時に、理科の先生が、
人間が実験動物の命を奪っていることをポロポロと涙
を流しながら、未だ小学生であった恩師の先生に話さ
れたそうであります。

恩師の先生は、未だ子供でありましたから、その時
どうすればよいか判らなかつたそうではありますが、子
供の時に問いかけられたその問題に非常に強い感銘を
受けられました。

そして、その後、大人になって後も、その問題が心
にあったそうではありますが、やがて、宗教の世界、禪
宗に帰依するようになって、その問題を自ら解決した、
と言っておられました。

このように、子供に一つの課題を与えて、それをそ
の子に一生涯の課題として考えさせ、解決させていく
教育、人間とは何かという真実に引き入れる教育のこ
とを Inductive Education というのであります。

これは、優れて倫理的な教育であります。Inductive
Education の世界は、まさに倫理の世界の問題であります。
そうだとすれば、これは倫理運動たるロータリーの問題
でもあります。そして、大切なことは、この倫理の
問題を青少年並びに RYLA の受講生に問いかける場
合に、先ず、ロータリアン自身がこの問題に取り組ま
なければ、若者達を育てること、人を育てることは出
来ないということでもあります。

要するに、技術教育だけではなく、このような
Inductive な教育によって、初めて人は育つのであります。
技術教育だけでは人は育たないのであります。

例えば、筋ジストロフィーの少年が、あと2年しか
生きられないと知って、その2年間に何を勉強したら

よいか、と教育専門家の先生に尋ねましたが、先生は
答えることが出来なかつたのであります。『私達の教
育は間違っていたのではないか』と述懐されたそうで
あります。

また、癌患者が、あと1年の命を勉強したいと言
った時、現在の教育体系の中で何を勉強せよと言えるの
でしょうか。全てがあまりに技術的であり、手段的で
あるために、1年で死んでしまったら意味がなくなる
のであります。1年しかない命で学ぶものがないのか。
これに答える教育もまた Inductive Education と呼ばれる
ものなのであります。

今、教育の分野を三つに分けて話をしましたが、教育
というものは、学校教育に限るものではありません。
社会教育、家庭教育、皆大事であります。

社会教育について言えば、昔は、小学校しか出てい
ないおじさん達にも、人の世話をよくする実に気っ風
のよい素晴らしい人が沢山いたものであります。特に
職人さん達に多かつたように思います。あのような人
達は、一体誰が何処で育てたのでしょうか。それは、
地域社会であります。昔は、地域社会に教育機能が
あつたのであります。

ところが、今、地域社会には、このような気っ風の
よいおじさん達が本当に少なくなつたように思われる
のであります。その原因は、色々あろうかと思ひます。
豊かさ、便利さばかりを求めて社会があまりに効率的
になったこと、核家族化の現象と相俟って、自分のこ
としか考えない人達が増えてきたことなどが考えられ
ますが、より根本的には、人々に倫理観念が薄れたこ
とではないかと思うのであります。

家庭教育がまた大事であります。これは、青少年を
育てる出発点でありまして、近年、いじめ、非行その
他アップツーデイトな問題が沢山あります。これらは、
RYLA で議論するには誠に適切な問題であろうかと思
うのであります。

殊に、子供を育てるについての父親の役割、母親の
役割などは、まさに青少年問題の出発点であり、今の
社会にとって問題は山積しているのであります。

父親の役割としては、最近、父親不在が問題化して
います。昔は、家庭の中での父親の役割は、細かいこ
とにはあまり口を出さないが、後ろ姿で教える、といわ
れてきたのであります。

確かに、昔は、そうでありました。家業がありました。

父母が目の前で働いている姿を見て子供は育ったのであります。後ろ姿というのは見えているものであります。

ところが、今は、何も見えていないから、大事なときに相談できないのであります。そのために、悩んで自殺する子もいることを父親たるものは忘れてはならないと思うのであります。

ロータリアンは、相手の立場に立って、とか、思いやりとか言いますが、家庭生活については、この言葉が、どれ程実践されているか、これは私自身に対する戒めの言葉でもあるのであります。

母親の役割がまた大きいのであります。母親は、父親と一体となって、初めて家庭生活は円満に行くのであります。青少年を育てるについて、最も大きな影響を及ぼすのが夫婦の状況であります。

子供というものは、両親の感情の揺らめきに非常に敏感であります。皆さんも経験があると思うが、一寸した意見の違いでも、例えば口喧嘩にもならなくても、子供は敏感に感じ取っています。

したがって、夫婦関係は、形だけ整っても駄目であります。環境がいくら素晴らしくても、夫婦がうまく行っていないければ、子供は不幸であります。

例えば、海辺の大きな邸宅から都会の中の小さな家に、子供を連れて離婚した母親は、『以前は、子供達はいいじていました。しかし、今は、子供達は屈託なく明るく暮らしています』と述懐していました。

もし、夫婦関係が完全に破綻したら、その状況を続けることは、子供に犠牲を強いるばかりであります。

ケストナーは、『世の中には、両親が別れたために不幸な子供は沢山居る。しかし、両親が別れないために不幸な子供も同じだけ居る』と言っています。

最近では、親が子供を愛情をもって育てなかったために殺伐な犯罪が増えているのであります。その他、家庭教育の問題は、簡単に語り尽くせないほどありますので、今日は割愛しておきます。

ロータリーは、何故RYLAを提唱するのか。それは、青少年の心を育てるプログラムだからであります。言い方を変えれば、それは、人を育てるプログラムであります。

そこで、人を育てるということについては、もう少し突っ込んで考えてみたいのであります。人を育てるということ考えた場合に、日本人は経済的に豊かにはなりませんが、そのために人間としての大切なもの

を失っていないだろうか。また、そのために、人を育てることに失敗してはいないだろうか、とも思うのであります。人を育てることは難しいです。しかし、育てなければなりません。そのためのRYLAであります。

人を育てる、と言っても、皆さんご承知のように、それは簡単なことではありません。色々な知識を教えるだけでは、人は育たないのであります。

『教育』とは、教え育てると書きます。したがって、知識を教えるだけでなく、知恵を育てなければなりません。ところが、これがまた大変難しいのであります。

一つ事例を出しておきます。臨濟宗妙心寺派の盛永宗興老師がお話になったことであります。老師は、ある雑誌に載っていた俳優の森繁久弥さんの対談をお読みになりました。それは、森繁久弥さんの友人で、東京の或るロータリークラブの会長になられた人の物語であります。

その人は、友達や知人を集めて、ロータリークラブの会長になったことの披露宴を開きました。会場はホテルでありますから、フランス料理、中国料理、西洋料理その他色々な料理があるにも拘わらず、料理に赤飯の握り飯を添えて出されました。そして、挨拶の中で、何故、赤飯の握り飯を出したのか、という理由を話されたのであります。

その人は、長野県の農家の長男として生まれました。幼い時から両親の手伝いをして、朝は暗いうちから田畑に出て働いて、夜は日が暮れてから帰ると言う生活をしていました。

しかし、長ずるに及んで、働いている田畑の広さが判ってきたので、これでは、幾ら働いても一生涯、水飲み百姓で過ぎなければならぬ。弟や妹を学校に行かせることも出来ない。したがって、都会に出て一旗挙げなければならぬと思ったのであります。

しかし、そのようなことを両親に相談しても、農家の長男というものは、祖先から譲り受けた田畑を守って行かなければなりませんから、許してくれる筈がない、両親が悲しむだけだと思って言い出すことも出来なかったのであります。

しかし、幾ら考えても、このままでは駄目なので、遂に家出をしようと決心しました。そして、或る夜、密かに肌着などを纏めておいて、翌朝、母親が起きる1時間前に起きて、階段を下りていくと、その日に

限って母親は、もう台所で水仕事をしていたのであります。

彼は、今更引き返すことも出来ないのに、黙って母親の後を通ろうとしましたところ、母親が振り向きもしないで、『赤飯を炊いておいたから、食べて行きなさい』と言ったのであります。

見ると、ちゃぶ台の上に赤飯がおいてありましたので、仕方なくそこへ座ると、母親が菜っ葉の味噌汁を添えてくれたのであります。

彼は、赤飯を口に入れたのであります。涙の塊のようなものがこみ上げてきて、どうしても喉を通らない。それを見た母親が、『起きたばかりで食べたくないのなら、お握りにしてあげるから持って行きなさい』と言ってくれたので、その握り飯を門口で受け取り、逃げるようにして真っ暗な道を停車場へ急いだのであります。

そして、家出を止めもせず、咎めもせず、怒りもせず、密かに赤飯を炊いて自分の家出を祝ってくれた母親が、今頃は、台所の柱にすがって泣いているであろう姿が臉に浮かんできて、彼は、泣きながら真っ暗な道を急いだのであります。

やがて、彼は、一生懸命に働いたお陰で収入も増え、遊ぶ時間も出来ました。母親が渡してくれた赤飯の握り飯が、恰もお守り札のように、心の中に張り付いていて、どうしても横道に逸れることが出来なかったのであります。

そして、真面目に働いた甲斐あって、名士の集まりと言われるロータリークラブに入れて頂き、今度はその会長にまで推されるようになりました。

これは、偏に、母親のお陰、赤飯の握り飯のお陰だと思つて、今日はどうしてもそのことを皆さんに聞いて頂きたくて、赤飯の握り飯を出したと言うのであります。

感激家の森繁久弥さんは、その話を、ポロポロ涙を流しながら聞いたそうであります。盛永宗興老師も、この記事を読んで涙がこぼれたと言っておられます。

ただ、老師は、自分の流した涙は、母親の愛情が深いということに対してだけの涙ではない。この母親には、自分の息子が今何を考え、何時何をするか、とすることを的確に見通す知恵がある。その素晴らしい知恵の裏付けのある愛情が、見事に、赤飯を炊いて黙って送り出すという素晴らしい働きをした、と感じて涙を流

したので話されたのであります。

何故、子供の心が判ったのでしょうか。何故、このような素晴らしい知恵を授かることが出来たのでしょうか。老師は、次のように説かれました。

昔の農家の女将さんが子供を育てるには、朝暗いうちから田畑に出て働かなければなりませんから、畑に出るときには、赤ん坊に3回分、4回分のおむつを何重にも巻いて、藁で作ったフゴ(畚)というものの中に赤ん坊を入れて、畑に働きに行くのであります。

子供の側にべったり付いてやっているわけにはいきません。しかし、赤ん坊と離れていればいるほど、乳房が張ってきますから、乳房の痛みが心の痛みとなって、フゴの中でオシッコだらけになって、おなかをすかして泣いている子供からは、一瞬たりともその心は離れなかつた筈であります。

いつも、子供とは心が繋がっている、そういう生き方の中から、この母親は、今日よく言われる親子の対話など全くなしに、しかも、自分の生み育てた息子が今何を考え、何時何をしようとしているのか、を的確に知って、そして、家出のその朝に、赤飯を炊くという見事な働きをしたのであります。

では、この母親に知識があったのか、と言うと、明治時代は、小学校は、6年制ではなくて4年制であります。したがって、学校の教育もそれほど受けていません。

では、情報はどうか、と言うと、明治時代には、農家にラジオなどありません。新聞もとっている家庭と、とっていない家庭がありました。

仮に、農家で新聞をとっていても、それを読むのは主人であって、農家の女将さんが横座りになって新聞を読むなどということは考えられないことでありました。

このように、この母親は、今日の母親達に比べて、極めて情報にも疎く、知識もなく、教育も受けていなかった、にも拘わらず、自分の子供が今何を考え、何時何をするか、とすることを的確に見抜いていたのであります。

これは、知識や教育の問題ではなく、私達が、先祖代々授けられてきた先天的な知恵によるものであります。

今、若い母親達が、高等教育を受け、短期大学、4年制大学に行きます。児童心理学、育児学、栄養学その他諸々の学問を学び、卒業してからもカルチャーセンターなどで沢山の知識を身に付けて、教育については、

いっばしの理屈をこねられる母親達が、果たして、自分の子供が、今何を考え、何時何をしようとしているのか、ということを実際に知っているのでしょうか。

これは、単なる知識や教育の問題ではない、と教師は説かれるのであります。

要するに、情報というものは、単なる知識とかデータの問題ではなくて、自分のぐるりを走り回ったり、泣いたり、笑ったりしている子供の生の体験から発信してくる情報を的確に自分の心で受け止めなければ、子供を育てるために役立つ情報とはならないのであります。

近來、子供を育てることに関して、親子の対話がなければ非行化するなどといわれますが、これは、何処かの評論家が頭で考えたことであろうかと思うのであります。

私の体験では、父親との対話は、殆どなかったけれども、私は父を心から尊敬していましたし、父も私を信頼してくれていました。これは、理屈の問題でも、知識の問題でもなく、対話の有無の問題でもないと思うのであります。

それは、私が、幼い時からの父の生活態度、一挙手一投足から何かを教えられてきたのであろうかと思うのであります。したがって、人を育てるといことは、このような感化が重要であり、これに比べて、最近では、あまりにも知識偏重になっているのではないかと思うのであります。

私達は、近來、あまりに豊かになり、あまりに便利に、あまりに自由になりすぎたために、人間の能力を減退させているようであります。

自由であることは、自由な生活が出来るその反面において、人間の包容力を衰えさせる虞があります。

そして、便利であることは、一方で、人間の機能や体力を衰えさせることになるのであります。これらの点も今一度反省してみる必要があろうかと思うのであります。

私達は、豊かに、便利に、自由になったがために、子供達に何らの感動も感化も与えられないかも知れません。先程の赤飯の握り飯を作った母親のような素晴らしい働き、素晴らしい感動など与えられないかも知れません。

それは、それでよいと思います。ただ、この母親のような生き方、育て方もあるということを実に留めておいて頂きたいのであります。

そして、RYLAの受講生達にこれらのことを話しかけて頂きたいと思うのであります。

この母親が育った明治時代は、人間の倫理が確立していました。しかし、昭和20年の敗戦によって、我が国は軍国主義を排除して民主主義国家の道を歩むようになりましたが、その際、昔からあった全ての古いものを捨ててしまいました。そのために、軍国主義のみならず、人間の本来あるべき姿を育てる倫理教育までも捨ててしまったのであります。そのツケが今廻って来ているのであります。このことは、最近の少年事件の増加を見れば明らかであります。

先程申し上げたシンガポールの教訓を忘れてはならないと思うのであります。私達は、子供を育てるについて、倫理教育ということを実に忘れてはならないと思うのであります。これは、ロータリー運動の核にある考え方なのであります。

以上、色々申し上げましたが、これらの話から、人を育てることについて、ロータリーが何を考えているのか、ロータリーの心のようなものが少しでも判って頂ければ有り難いと思うのであります。

ロータリーは倫理運動でありますから、ロータリークラブは、ロータリアンに奉仕の心を授けるところ、ロータリアンの心を育てるところであります。言わばロータリークラブは学校のようなところでもあります。

クラブの例会で、自己研鑽・切磋琢磨をします。その結果、ロータリアンの人格が向上し、そのエネルギーが社会万般のことに放流されるというのがロータリーの基本的な考え方であります。

そして、ロータリークラブは、社交クラブでありますから、皆で仲良くし、クラブライフを楽しみながら、奉仕の心を磨く、即ち、お互いを高め合うことにより人は育つのであります。この皆で学び合う楽しさ、お互いを高め合う楽しさを若者達にも楽しんで貰おうと考えたのがRYLAの発想であったのであります。

ただ、楽しさと言っても色々ありまして、酒を飲むことや、旅行、歌を唄うことなど全て結構であります。これは感性的な楽しみ・感性的な親睦であります。

ところが、ロータリーで言うところの楽しさ・親睦というのは、今申し上げたように、ロータリアン達がお互いに心を磨き合う楽しさ、己の足らざるところを他のロータリアンから学び合う楽しさ・親睦であり、これは、クラブの中で集団で磨くのであります。

たときの話であります。

暑い夏の或る日、食堂で約130人位の夕食のために、皿とナイフとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられました。その時、先輩のシスターが先生に、『シスター、貴女は、今、何を考えていますか』とお尋ねになりました。

先生は、『何も考えていません』とお答えになりました。すると、その先輩のシスターは、『貴女は、時間を無駄にしています』と。先生は自分の耳を疑ったそうであります。『何故?』

その先輩は、『お皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがてその席にお座りになる人のために、何故、心の中で「お幸せに!」と祈りながら並べないのですか。何も考えないで、ただ漫然とお皿とフォークとナイフを並べるということは、時間を無駄にしています』と諭されたそうであります。

渡辺先生は、『私は、今まで如何に効率的に仕事をするか、ということを実に教えられてきましたが、時間に愛を込める、仕事に愛を込めるということは、初めて教わりました。時間に愛を込めること、お皿は同じ早さで、同じ姿で並びます。

しかし、目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、世の中は大きく変わるということ、それは一つには、私がお幸せにと祈って置いたお皿で召し上がった方は、必ずお幸せになるという信仰であります。

ただ、それよりも私にとって大切なことは、私が救われたということ、つまり、私にとって、つまらない仕事はなくなったということ、お皿並べというつまらない仕事、雑用だと思っていた仕事は実はそうではない。雑用は、私が仕事を雑にした時に雑用になるということを実に教えられました。だから、救われたのは私です。

つまらないと思ってお皿を置く、お幸せにと祈ってお皿を置く。外から見た限りは全く同じに見えます。かかった時間も変わらない。しかし、仕事の量は同じでも、仕事の質が変わっている、ということは、その人自身が変わったということなんです』と述懐しておられました。

お皿を並べるというつまらない行為に愛を込めるように、自分の仕事に愛を込める。私達の全ての行動に愛を込めると言うことは、言い換えれば、倫理的な生活をなささい、と言うことでもあります。これは人を育

恰も、芋を桶の中に入れてかき混ぜると、芋と芋とが擦れ合って皮が剥けて磨かれていくように、ロータリアン同士がクラブの中で磨かれていくのであります。

要するに、ロータリーでいうところの楽しさとか親睦というものは、ダンスや歌のような感性的な親睦のほかに、自分を磨く親睦、皆で切磋琢磨して自分を高め合う親睦、このような精神的親睦を言うのであります。

そこで、ロータリーの心を一言で言えば何か、と言えば、それは、お互いに切磋琢磨してお互いを高め合うこと、言い換えれば、全ての人の幸せを祈り合うことでもあります。心を磨くのは、何のためか、それは万人の幸せのためであります。

さて、ロータリーは倫理運動でありますから、ロータリーの心は、全ての生活関係において、自分の行動に愛を込める、ということでもあります。この点について、一つの物語を紹介しておきます。

つい先日は、2.26事件の起きた日でありました。昭和11年2月26日、陸軍の青年将校達が反乱を起こした日であります。この時、反乱軍に殺された人に、教育総監渡辺錠太郎大将がいました。渡辺大将には、当時、小学生のお嬢さんがいました。渡辺和子さんと言います。

今、日本カソリック学校協会の会長をしておられますが、ごく最近までは、岡山ノートルダム聖心女子大学の学長をしておられました。

ところで、反乱軍が渡辺邸に侵入してきたとき、渡辺大将は、お嬢さんの渡辺和子先生と書斎にいたのですが、反乱軍が書斎に入ってきたとき、渡辺大将は、咄嗟にお嬢さんを机の下に隠しました。そこへ、反乱軍が入って来て、渡辺大将に43発の軽機関銃の銃弾を浴びせ、銃剣で減多突きにして殺してしまったのであります。

和子先生は、1メートルと離れていない目の前で、お父様を殺されてしまったのであります。このことが動機となって、カソリックの信仰に入られたのかと思っておられました。先生のお話を聞くとそうではないと言っておられました。

実は、30歳になると、修道女にはなれないそうありますが、先生は、29歳まで外資系の会社で、部下をもつエリートな立場におられたのであります。

しかし、感ずるところがあつて、29歳にしてカソリックの信仰の道に入られました。

そして、修道女としてアメリカのボストンに渡られ

てる基本前提であります。

このように、心の問題を重視するのがロータリーの奉仕なのであります。したがって、渡辺先生の言葉は、ロータリーの奉仕の基本的な考え方を示しているのであります。仕事に愛を込める、時間に愛を込める、そのことなくして倫理的な人間を育てることは出来ないと思うのであります。

イギリスでは、『ロータリーは人間の魂の在り方の問題である』とも言われているように、ロータリーの奉仕は、心の問題を重視する優れて精神的な奉仕なのであります。

渡辺先生は、お皿を並べるといふ単純な行為に、「幸せを祈るといふ目に見えない大切なものが籠められるか籠められないかによって、世の中は大きく変わる」と言われました。このことについて若干私の考えを補足しておきます。

去年は、大きな台風が10回も来て、大変な被害をもたらしました。あの台風の渦巻は、左回りであります。これは、赤道近くで発生した台風が北上するときに、地球が東から西へ自転しているために台風の渦は、左回りになるのであります。したがって、南半球では逆に右回りになります。

この現象は、地球上の全ての現象に現れています。例えば、風呂の水を抜いた時、水は最後に左回りに渦を巻きながら流れていきます。これを発見したフランス人の名前をとって、この現象を「コリオリの力」と言います。

このコリオリの力というものは、洗面所の水の栓を抜いたときに水が渦を巻くという本来、本当に弱い弱い力であります。したがって、台風も赤道直下で発生した時点では、単なる上昇気流であります。それが台風となるとコリオリの力によって渦を巻くようになり、それが台風となって北上するのであります。

このように、最初は、弱い弱い力がやがて大きな力になり、台風のような巨大な自然現象となって、自然を破壊してしまうのであります。

実は、このような現象は、人間の社会でも起こっています。1989年にソビエト連邦が崩壊しました。あの原因は、ソビエトの国民一人ひとりの心の中にあつた目に見えない小さな小さな不満であります。まさに、コリオリの力のような小さな不満が積み積み積もって、モスクワにおける民衆の暴動に際して一気に爆発し、

遂にソビエト連邦という巨大な主権国家を崩壊させてしまったのであります。

このように、国民一人ひとりの心の中にあるものが世の中を大きく変えていくのであります。渡辺先生が、お皿を並べるといふ単純な行為に、「幸せを祈るといふ目に見えない大切なものが籠められるか籠められないかによって、世の中は大きく変わる」と言われたのと同じであります。

私達一人ひとりの心の中に宿るもの、それが大事なのであります。このことのロータリー的な意味を補足しておきます。

ロータリーでは、毎年、国際ロータリーの会長が、自分の個人的な所信の表明として、ターゲットを出して来ました。私の好きなターゲットは、1960-61年度の国際ロータリー会長エド・マクローリン (J.Edd McLaughlin) の“You are ROTARY”というターゲットであります。即ち、

“You are ROTARY” 貴方がロータリーですよ。ロータリーというの、国際ロータリーのことでない、ロータリークラブのことでない。あなた方一人ひとりのロータリアンの心の中に宿るもの、それがロータリーなのですよ、と呼びかけているのであります。

実は、これは優れてアメリカ的な発想なのであります。アメリカ的なものの考え方によれば、国家というものは、政府でもない、国会でもない、国民一人ひとりの心の中に宿るものだと考えるのであります。即ち、

アメリカ法即ち、英米法の考え方では、国家とは国民の総体であると考えます。しかし、国民が一億人集まっても、それだけでは烏合の衆に過ぎません。この人間の集団を国家という統一体にするためには、主権や統治権などのプラスアルファがなければなりません。

では、このプラスアルファは、一体何処にあるのかと言うと、一億の国民の一人ひとりの心の中に宿る、即ち、一人一人の国民に分属する、と考えるのであります。日本国憲法の国民主権という思想も、その根底には、この考え方があるのであります。日本では、明治の先覚者福沢諭吉先生が早くからこの考え方をおられました。

このように英米法は、国家とは一人ひとりの国民のことだと言う立場をとるのであります。したがって、一人ひとりの国民が理性の命ずるところに従って自分の徳性を磨けば、その徳性の総和は、必ず国の政治に

反映し、国家の徳性も上がって行くと考えてるのであります。国家の徳性が上がれば、あの忌まわしい戦争も予防できると考えるのであります。

ロータリーもこれと同じであつて、一人ひとりのロータリアンやRYLAの受講生が自分の徳性を磨く、心を磨くことによって、地域社会、国際社会の徳性が磨かれ、社会全体が明るくなるとマクローリン会長は説くのであります。

このように、徳性を磨く、心を磨く、ということは、先程の渡辺和子先生の話にもありましたように、私達一人一人がお互いに幸せを祈り合うことであります。

RYLAの受講生達が、ロータリアン達が、そして、世界中の人達がお互いに徳性を磨き合い、幸せを祈り合う世界、そのような世界になることがロータリーの夢なのであります。だからこそ、ロータリーは、RYLAセミナーを開催しているのであります。

